

福岡女学院大学メディア・コミュニケーション学科における初年次教育の試み(5)

二階堂 整・守山 恵子

はじめに

メディア・コミュニケーション学科の1年生必修科目、入門ワークショップ（2017年度は51名受講）では、大学で必要とされる論理的な文章が書けるようになることを目標に授業を続けている。これまで、毎年、前年度の授業の振り返りに基づき改善を行っており、2013年度、2014年度、2015年度、2016年度と連続してそれぞれの年度の『紀要』紙上で、報告と検証を行ってきた（二階堂・守山2014、守山・二階堂2015、守山・二階堂2016、二階堂・守山2017）。2016年度紀要では、後期前半に行った要約の授業を中心に論じた。本稿では、前年度の検証から課題と考えられたことをどのように改善したかということと、今年度後期後半に行ったグループ活動を中心に論じる。

1. 2017年度の初年次教育概観

2017年度の入門ワークショップでは、前年度に課題として挙げたことがら（守山・二階堂2017）のうち以下についての改善を試みた。

- (1) 図書館司書による文献検索ガイダンスの回数と内容
- (2) 後期のテキスト
- (3) 後期の要約の字数

- (4) 後期の小論文のテーマ
- (5) 後期のグループ活動の方法
- (6) 後期のアウトラインとレジユメの説明
- (7) 授業の流れの説明

まず、今年度の入門ワークショップを概観し、章を改め、改善点について詳述する。

1-1 前期の流れ

時事ワークシートと漢字テストは、これまで通り毎回行った。朝日新聞時事ワークシート (<http://manabu.asahi.com/worksheet/>) の「週刊トップニュース」^(注1) の出題シートを授業で配布し、翌週の授業時間の最初に配布する解説付きの解答シートで学生各人がその場で自己採点と点数の記録を行う。さらに学生が解答シートから15問の漢字テストを作成し、翌週、時事ワークシートの採点の前に、他の学生と自己作成のテストを交換して解答、作問者が採点、解答者が点数の記録を行うという手順である。

前期の小論文やピア活動のテーマは、「大学は制服を採用すべきか、否か」を継続した。個人で取り組む前期最後の最終論文も昨年と同じテーマとした。テキストも大幅な変更は行わなかった。新たな取り組みは、図書館司書による文献検索ガイダンス「図書館の有効活用」の授業である。前年度は後期のみであったが、今年度は前期にも、小論文のテーマに合わせてコンピュータ室で授業が行われた。学生は、最終課題のための参考文献を探す方法について、実際に検索をしながら学んだ。

eラーニング^(注2)の取り組みも続けた。51人中34人の学生が全問正解に達し、加えて2名が9割正解を超えた。しかし、15名の学生は達成率が5割に満たなかった。これまでと同じように、進捗率の良い学生に学期途中で賞品を出したり、全体に声かけをしたりしたが、3割の学生（欠席が目立つ学生が多い）が最後まで取り組めず、残念な結果となった。結果を見ると、仲間同士の声かけが役に立つのではないかと思われる。それは、欠席がちの学

生たちの中にも、全問正解の学生と5割以下の学生がおり、全問正解の学生は仲の良い学生同士数人が全員全問正解であったり、仲の良い数人が揃って5割以下だったという結果で、仲間の誰かが気づけば、そのグループ全員が取り組むと思われるからである。この点は次年度に活かしていきたい。

1-2 後期の流れ

後期の授業全体のテーマは著作権である。後期前半は、1グループ3人での活動を主に、今期のテキスト『正しいコピーのすすめ』（宮武久佳著、岩波ジュニア新書、2017）の内容要約を行った。まず、全員が『正しいコピーのすすめ』の「はじめに」部分を要約し、要約の仕方を学び、さらにグループでそれぞれの要約の評価と改善の話し合いの後、よりよい要約を作成した。次に、テキスト本文を17のセクションに分け、各グループに10ページ前後ずつ（4,000字前後）を割り当てて、それぞれが担当セクションを100字に要約し、発表することとした。前年度は、3,000字程度の本文の要約を600～800字に要約していたが、ただ本文を切り貼りする学生が目立ち、「要約」を理解するためには100字が適当だろうという筆者らの考えから、急遽、予定を変更し、今期は、全員で「はじめに」の100字要約に取り組んだ。

学生1人1人がテキストの最初から最後までを熟読し、発表の内容と自分の理解を比べて聞き、理解を深めることができるよう、各人が発表の前々週に内容に関する質問を用紙に記入、提出した。発表セクション担当者は提出された質問用紙を受け取り検討し、発表の際に、質問の中から2つを選んで答えることとした。また、発表を聞いた学生は、コメントシートにコメントを記入することとした。ここまでの、後期の前半部分の概要である。

後期後半に入ってから、図書館司書による授業が行われた。著作権に関するテーマ候補を取り上げ、配布資料に沿って、最終小論文のテーマに関する文献検索の方法の説明と実習が行われた。最終小論文のテーマは、学生に10のテーマを示し、その中から希望するテーマを選ばせた。

最終小論文のテーマごとに3人～6人のグループを11作り、グループでイ

メージマップ作り，構想マップ作り，文献探し，発表準備のためのディスカッション，発表のためのレジюме作成を行った。グループでの活動には5週かけた。また，この間に，最終小論文のためのアウトラインを各人が作成提出し，チェックを受けた。

グループの発表は，作成したレジюмеを使って行われた。これには2回の授業があてられた。学生は年内に最終小論文を提出し，年明けの最終授業日に返却とフィードバックが行われた。以上が後期後半の概要である。

2 授業の改善点と課題

以下では，今期の7項目の改善点について詳述検討し，次年度へ向けての課題を明らかにする。その際，後期に学生に実施した授業アンケートの結果を利用する。

2-1 図書館司書による文献検索ガイダンスの回数増と内容

図書館司書による授業は，前年度は，後期に1回であったが，前期授業でも行えればと考えたため，今期は，前期に，前期の小論文のテーマであった「大学での制服制定の是非」を例に図書館では何ができるのか，図書館を利用すると何が見つかるのか，効果的な利用をするためにはどんな方法があるのかなど基本的なことを，関係する文献探しをPC室で実際に行いながら学んだ。

後期にも，図書館司書による図書館ガイダンス「文献検索演習」を，著作権問題と小論文のテーマに合わせてPC室で行った。この際，図書館司書によって授業に沿った資料（資料1）が用意された。口頭説明とモニター上での図書館職員の検索に従って，①ジャパンナレッジでの検索，②キーワードのたて方，③CiNii Articlesでの検索，④テーマとなっている商品などの公式ホームページの利用，⑤Discovery Serviceでの検索，⑥google Scholarでの検索，⑦聞蔵を使った記事の検索，⑧特許庁ホームページでの判例の検索

などを、順を追って学生たち一人一人も実際に体験した。教員が机間をまわり、必要があれば戸惑っている学生に声掛けをしたり、助言をしたりしたが、ほとんどの学生は、スムーズに検索を行うことができた。これは、丁寧な資料が用意されていたこと、説明がわかりやすかったこと、モニターがあったこと、前期に一度図書館ガイダンスで文献検索を体験していたことなどによると考えられる。授業後のアンケートでも、ガイダンスの難易について、「ちょうどよかった」という回答が8割を超え、全員が「説明がよかった」(約7割)あるいは「説明はまあまあだった」(約3割)と答えた。また、小論文を書くときに図書館を「ぜひ利用したい」(約2割)「利用してみようと思う」(約7割)と答えており、ガイダンスの効果が見られた。学生が学期最後に提出した個人の小論文の参考文献欄を見ると、これまで繰り返し注意してもなかなかなくならなかったいわゆるまとめサイトやWikipediaの利用はほとんどなくなり、適切な参考文献を探して利用できている者が増えたことから、ガイダンスに効果があったことがわかる。今後も、前期と後期、2回のガイダンスを計画したい。また、上級学年でもその時々必要に応じた図書館ガイダンスの実施が、質の高い論文作成につながると考えられる。上級学年になり、自主的なテーマ選択をして論文執筆に取り組もうとしたときに、改めて図書館ガイダンスを受けると、初年次には注意を払わなかった検索の方法や資料選択のポイント、あるいは忘れてしまったことなどの必要性が感じられるようになると思われるからである。

図書館ガイダンスは、検索システムに毎年細かな変更点があり、教員が受ける必要もあることを改めて感じたことから、今後は、これまで以上に事前に図書館司書と内容や方法について十分な検討や打ち合わせをし、ガイダンス後の学生指導に活かしたいと考えている。

2-2 後期のテキスト

後期の全体のテーマは前年度と同様「著作権」であったが、テキストは、前年度使用した『18歳の著作権入門』(福井健策著、ちくまプリマー新書)

から『正しいコピペのすすめ』（宮武久佳著，岩波ジュニア新書）に変更した。両者とも10代の読者を想定した書物である。前年度にテキスト選択にあたって考慮した点^(注3)の1つ，発行年が，前者が2015年に対し，後者が2017年であり，後者に新しい情報が盛り込まれていると考えられたことが変更の理由の1つである。その他の点に違いは少なかったが，章分けの点で前者が20章で構成されているのに対し，後者は6章であり，これが理解の難易に影響するかもしれないと思われた。しかし，後者は章の中が小見出しで分けられており，それを考えると，章立ての少なさはかえってまとまりを生んでいるとも考えられた。また，後者のタイトルから，頭ごなしに「コピペはいけない」というのではなく，どうしたら他の人の考えや作品を使うことができるのかを知ることの重要性が感じられると思われた。さらに，後者の筆者が大学の教員であることから，大学生の状況を把握して書かれているだろうとも考えた。

学生たちにとっては，テキストはどうだったのだろうか。『正しいコピペのすすめ』を「わかりやすかった」「とてもわかりやすかった」と評価した者は全体の約3割であり，また，「繰り返し読んだ」者も4割に満たなかった。これは，前年度のテキストを「わかりやすかった」「とてもわかりやすかった」と評価した者が5割，「繰り返し読んだ」者が5割を超えていたことと比べると，テキストの変更が適切な判断だったとはいいがたい。

テキストの選択については，次年度にむけて，テキスト自体の内容の点だけでなく，授業でのテキストの扱い方も含めて，再考する必要があると考えている。今年度は，要約を個人とグループで行ったが，要約のしやすさや要約する分量，区切りなども考慮しなければならない。

2-3 後期前半のグループ活動（要約）

前年度と同様，後期のテーマは「著作権」で，それは要約を学ぶための材料でもあり，同時に今後の大学での学習や研究に必要な「著作権」についての正しい知識を学生が身につけるためでもあった。

すでに述べたように、まず、学生全員がそれぞれ、テキストの「はじめに」の部分(約3,000字)を600字程度に要約し、その後、要約の方法や注意点についての説明を聞き、再度要約をしなおした。説明前に要約をさせたのは、自分の要約と説明を比べて考え、問題点に気づいてほしいと思ったからである。しかし、説明後の再度の要約でも、前年度同様、本文の流れに引きずられ、本文を切り貼りすることから抜け出せないことがわかったので、最も重要なことを取り出し、自分のことばで言い換えざるを得ない状況にするため、要約の字数を100字に変更し、3人1組のグループで「はじめに」部分の100字要約を完成させた。「はじめに」の内容は、個々人が要約を2回行っていたので、ほぼ理解しており、100字にするためにどの部分をどう取り出すかについて、意見を交換し、取り出した部分をどのような表現で100字にまとめるか、グループで考えた。また、3名の教員が100字要約を問題点のあるものも含め複数作成し、それを学生たちに示して説明した。学生たちは、どのグループもほぼ同じことがらを重要だとして取り出していること、しかし、100字にする方法と表現はそれぞれ違うこと、要約するというのとはどういうことかに気づき、どうすればわかりやすく正確に内容を伝えることができるかを考えはじめた。

「はじめに」の100字要約の経験を生かすため、その後の3人のグループで1つのセクションを要約発表する課題も、100字要約とし、それぞれの要約を持ち寄って、グループとしての要約を完成させた。また、他の学生から提出された、担当セクションの内容に関する質問の中から二つを選び、どのように回答するかをグループで話し合った。発表は、まず、グループの一人が100字の要約を1回読み、さらに聞いている学生の反応を見ながら、もう1～2回読んだ。その後、準備しておいた質問に対する回答を発表した。

この活動は、まず、3人がそれぞれ要約をしていくことと、検討の際に意見を言いやすい雰囲気が出ていくことが前提となる。それは要約をするためにグループでの十分な話し合いが必要だったからである。各人が400字を超えている要約を持ち寄って、グループで新たに要約を完成させようとした

場合、これまで、グループの中の1名の要約を土台に、いくらか手を入れてグループの要約を完成させる場合と、それぞれのよい部分をつなぎ合わせようとする場合があった。いずれにしても、グループで話し合いをしながら新たなものを考え出すという作業にはなかなかならなかった。100字程度の要約とすると、話し合いができ、それをしながらいくつも新たに書いてみることで、グループの協同作業が行われていた。しかし、要約をしてきたメンバーが1人ないし2人だったグループは、よく考えないまま、準備してきたメンバーの要約をそのまま取り上げるようになった。また、それぞれの要約のポイントが違う場合に、大事だと思う点を客観的な理由を述べて主張しあうということにはなかなかならず、話し合う前に自信のない学生が自分のものを取り下げってしまうということもあった。今後は、話し合いを実りあるものにするために、三つの要約を比較するための一覧表を作成させるなど、自分の考えも含め、複数の考えを客観的に比較検討することができるような方法を考えたい。

100字要約には、聞いている者にとっては、100字程度で2～3回聞くことができるという利点があった。また、すべてのグループの発表終了後、要約をまとめて印刷し、読み直すことで、全体の流れを再確認することもできた。ただ、問題は、グループの100字要約を教員が事前にチェックできなかったため、適切に要約できていなかったものがあったことである。話のまくら部分も書いてしまい、主要なことがらが中途半端になったり、ことばの定義に字数が割かれたり、個別の事例を取り上げて一般化ができなかったりすることがあった。これは次年度に改善が必要である。改善の方法として、グループの中に、注意すべき点が守られているかをチェックする役割を分担することも考えられよう。また、教員が3,000字前後の本文を、まず200～300字に要約し、それをさらに100字に要約にするという過程を見せるということも考えられる。今年度は100字要約のみを見せて説明したが、「過程」を見せることによって、最終的に100字に盛り込む主要なことがらを選択しやすくなることが期待できる。教員による助

言もできるよう、時間的な余裕を持ちたい。

グループで回答を用意するための質問は、全学生が事前に提出したが、形ばかりの質問や適当な質問が多く、よい質問とは何かというものの理解が不足していたと思われる。質問を受ける側に立つと、考えさせられる質問、内容の深いところについての質問、本質的な質問とはどのようなものか、おのずとわかるのではないかと思っただが、いざ自分が質問をする段になると、上っ面の質問ばかりになったようだ。改善の方法として、共通して扱ったテキストの「はじめに」の部分で各自が質問を考え、出された質問の中からどの質問がどうして評価されるのか、質問をどう変えれば内容のある回答が得られるのか、それらの質問に答えるために何を準備すべきかなどを全員で考える時間をとることが考えられる。それぞれのグループが受け取った質問のどれに回答するかは、グループに選択権があり、そのため簡単に回答が準備できる質問を選択する傾向もみられ、この点も改善が必要だと考えている。何らかの方法で、選択肢の幅を狭くするなどの改善をしたい。

2-4 後期の小論文のテーマ

今年度のテーマ候補として、以下の9つを学生に示した。前年度は選択肢が4つと少なく、学生たちの興味関心に沿い、資料が探しやすいテーマの数を増やす必要があるという反省があったからである。最終的には、11のグループ7つのテーマとなった。

- ① 本歌取りは著作権を侵害しているか否か。(著作権保護期間は考慮しない。)
- ② シェリー・レヴィーンの『泉 (マイセル・デュシャンによる：AP)』は、マイセル・デュシャンの『泉』の著作権を侵害しているか否か。
- ③ サンリオのキャラクター「キャシー」はオランダメルシス社の「ミッフィー」の著作権侵害か。
- ④ ジャズバンドPE'Zの「大地讃頌」は合唱曲「大地讃頌」の著作権を侵害しているか否か。

- ⑤ 大手音楽教室での演奏にJASRACが著作権料の徴収を始めるとしたが、音楽教室での演奏に演奏権がおよぶか否か。
- ⑥ 猿が描いた絵に著作権があるか否か。あるとすれば誰が著作権者か。
- ⑦ 2020年東京オリンピックの佐野研二郎氏による当初の応募作はベルギーの劇場ロゴの著作権を侵害してるか否か。
- ⑧ 村上隆氏の「DOB君」はナルミヤのキャラクター「マウスくん」の著作権を侵害しているか否か。
- ⑨ マリカーは任天堂の著作権を侵害しているか否か。

学生は（希望調査書が締め切りまでに未提出だった学生を除き）、全員が第一希望のテーマで活動することになった。本歌取り（2グループ）、ミッフィーとキャシー（2グループ）、大地讃頌（1グループ）、音楽教室での演奏権（1グループ）、猿が描いた絵の著作権（1グループ）、東京オリンピックエンブレム（2グループ）、マリカー（2グループ）の11グループである。

小論文のテーマの選択肢を増やしたことは、学生の取り組みにくさを軽減するのに役立ったと思われる。前年度は、テーマに決めにくさを感じていた学生が2割おり、また、資料が見つげにくかったという学生は5割であったが、今年度は、テーマが決めにくいと感じた学生は4人、資料が見つげにくかったという学生も3割弱となった。テーマの内容を検討しなおし、数を増やし、図書館ガイダンスと連続性をもたせたことが一定の効果を発揮したと考えられる。

2-5 後期後半の小論文のテーマごとのグループによる活動

後期後半のグループ活動は、小論文のテーマごとのグループで行った。小論文のテーマは、興味関心にしたがって各自が選んでおり、まず、イメージマップ作りから活動をスタートさせた。表1に流れを示す。

表1 後期後半の活動

	グループ活動	全体（講義＋作業他）	個人作業
1	イメージマップ作り		文献調査開始
2		図書館ガイダンス	文献調査継続，（仮）参考文献リスト作成
3	構想マップ作り	構想マップについて発表（説明） アウトラインについて	（仮）参考文献リスト作成→提出→返却 アウトライン（案）作成→提出→返却
4	参考文献の内容等をもとに，主張を支える理由，根拠についての話し合い		個人小論文構想
5	発表準備，レジюме検討	レジюмеについて	個人小論文作成開始
6	発表準備，レジюме作成→提出	アウトラインについて教員からのコメント，諸注意	個人小論文作成
7	発表		発表評価表記入 個人小論文作成
8	発表		発表評価表記入 個人小論文作成
9			個人小論文完成提出
10		小論文について教員からのコメント	個人小論文返却

イメージマップを利用した話し合いは，前期にも個人で，また協同行った活動である。今回は，グループでのみ行った。それぞれが一つでも多くの関連することを考え出し，可視化し，整理し，共有するためである。手順は以下①～⑦のとおりである。

- ① ホワイトボードを準備し，ポストイットに，1人1人がグループのテーマから思いついたことばを書く。ポストイット1枚には，1つのことばだけを書く。
- ② ホワイトボードの中央にグループのテーマを書く。全員のポストイットを1枚ずつホワイトボード上に貼る。同じことばがあれば，重ねて貼る。ホワイトボードの周囲に立って作業をする。
- ③ 全体を眺め，関連することばを近くにまとめるなど，ポストイットを貼り替えて整理する。

- ④ 関連性が視覚的にわかるように、丸で囲んだり、線で結んだりする。
- ⑤ 他に思いつくことばがないか、加えたいことがないかを考え、必要があれば加える。
- ⑥ 丸で囲んだポストイットの集合（まとめり）を一言で説明するとしたら、どんなタイトルをつけたらいいかを考えて見出しをつけ、ホワイトボードに書き入れる。
- ⑦ イメージマップを書き写すか写真に撮るなどの何らかの方法で保存しておく。

イメージマップを作ると、お互いが考えていることを共有し、1人では気づけなかったことに気づくことができる。この作業の後、各自、文献探しをスタートさせた。文献探しをスタートさせてから、図書館ガイダンスが行われた。いくらか自分で探しておくことが、ガイダンスを自分のこととして聞く態度につながるだろうと考えた。ガイダンスの後、個人で参考文献リストを作成させた。

構想マップは、参考文献を探す過程を通して、テーマについての知識を増し、考えをある程度広げたのち、考えを整理するために、グループで行った。

構想マップでは、まず、テーマに関して、どのような主張をするかを仮に決め、その理由や根拠となる具体的な情報（参考文献を利用して）、不足していることがらなどを整理する。手順は次のとおりである。

- ① 主張することがらをホワイトボードの真ん中に書く。
- ② 主張したいことの理由をそれぞれがポストイットに書き出す。
- ③ 全員のポストイットを1枚ずつホワイトボードに貼る。同じものは重ねて貼る。この時、ホワイトボードの周囲に立って作業をする。
- ④ 関連することを近くに貼り直し、分類ができないか考える。
- ⑤ 分類したものに名まえ（見出し）をつけて、整理する。
- ⑥ それぞれの理由の根拠となることがらについて参考文献情報も合わせ、書き加える。根拠を探す必要がある理由はどれかを明らかにする。
- ⑦ 説得力のある理由、重要な理由がどれかを考え、順番をつける。

前年度、グループ活動に割く時間を十分に確保できなかったという反省から、今年度は、時間を増やした。欠席する学生がいて、話し合いがスムーズにすすまなかったり、発表ができなかったり、負担が偏ったり、参考文献を探してきていない学生が他の学生を頼ったり、という問題はあったが、話し合いを通して、新たな視点を得たり、情報を交換し合ったり、補いあったりすることはできたようである。負担の偏りについては、不満を持つ学生もいたことから、何らかの改善が必要である。

グループでの活動は、「他の人の考えから学ぶことがあった」と考える学生が7割に達し、「活動を活発に行うことができた」と考える学生も7割に達したことから、今後も続けていきたいと考えている。

2-6 後期のアウトラインとレジユメの指導

前期には、先に小論文を書き、それをもとにアウトラインを作成するという、通常とは逆の流れでアウトラインを説明した。作成したのから、アウトラインとはどのようなものであるかは理解できただろうが、アウトラインの役割を学生たちが十分に理解したとは言えなかった。

後期は、アウトラインを説明するための資料(資料2)を作成し、アウトラインの段階で十分な検討を行うことができ、修正を加えることが可能となり、その後、小論文をスムーズに書き上げることができていることを学生たちに実感してもらいたいと考えた。

レジユメは、『Master of Writing』^(注4)を参考資料として説明を行った。アウトラインと似た点はあるものの、アウトラインは小論文を書く自分のためであるのに対し、レジユメは発表を聞く人のためであることがわかることが学生にとって重要だと考えた。実際に発表のために準備されたレジユメの中には、何も知らない人が発表の際に参照するには情報が不十分なものが散見され、今後も、レジユメの指導は上級学年の各ゼミ活動などで指導を続けることが必要だと思われた。学生は11グループが作成した11のレジユメを手にし、教員からの指摘やコメントも加わって、わかりやすいレジユメと

不足のあるレジュメを比較することができた。

「アウトラインの作り方がわかった」という学生と「レジュメの作り方がわかった」という学生はどちらも約6割で、「アウトラインの作り方がとてもよくわかった」学生はレジュメも同じようにわかっており、「アウトラインの作り方がよくわからない」学生はレジュメも同じようにわかっていない。二つのことの理解が相関していることから、今後、両者の説明に連続性を持たせることを意識したい。

2-7 授業の流れの説明

前年度、授業内容や授業の進め方の説明が不足していた反省から、今年度は、丁寧な説明を心がけたいと考えていた。しかし、実際は、特に後期に、途中での計画変更が起こったり、課題の再説明が必要になったりした。気づいた教員が、授業の流れを説明したり、今後の予定を折に触れて説明したりしたが、これらのことを来年度以降は計画的に必ず行い、学生の不安や不満を解消できるよう努力したい。授業計画表は前期も後期も、学期開始時に配布したが、途中での変更の周知が徹底していなかった。また3名の教員の情報共有や理解も時に不十分であった。事前に計画の検討に時間を十分に割かなかったことが一番の原因である。新年度は、時間を十分に掛けて計画を練り、共有したいと考えている。

おわりに

2017年度もメディア・コミュニケーション学科は51名の新生を得て、入門ワークショップを3クラス体制で行った。共通の計画に沿って、後期の後半からは、クラスごとではなく、テーマごとのグループで活動も行った。

グループでの活動は、単なる話し合いではなく、イメージマップと構想マップを作成するという作業があり、出席してるメンバー全員が何をすべきかがわかっており、責任を持って参加している様子が見てとれた。グループでの

発表もある程度役割を分担して行うことができた。しかし、このグループ活動のあとにそれぞれが提出した最終小論文に独自性がなく、どれも類似したものになってしまったのは問題点だと考えている。グループ発表でのテーマについてのある主張とその理由、そしてそれを支える根拠を時間をかけてグループで論じ、準備したことによって、個人での小論文を書くときに、それ以上のものがあるいはそれとは違うものが書けなかったということだろう。また、グループの他のメンバーが探した文献の内容をよく理解しないまま利用したことによって、説明不足や論理のずれがみられることもあった。たくさん集めた資料を使いこなせず、引用や要約が正確にできていないこともあった。グループでの活動が充実すればするほど、個人の考えもそれに引きずられるのは無理もないが、安易に引きずられないようにするために、個人での最終小論文を書く際に、グループでの発表時の主張とは逆の主張をするよう指示するなど今後検討したい。

毎年、前年度の反省を生かして改善を続けているが、改善は、まだ授業体制の枠の中でのみであり、学科内での上級学年とのつながりや、学内での情報交換へ広げることが十分できていない。入門ワークショップ内での改善はもちろんだが、それを超える方法を模索し、今後は、高等学校との連携も視野に入れていくことを考えている。

注

- 1 時事ワークシート「週間トップニュース」を利用しているのは、学生が初年次から時事ニュースに関心を持ち、就職活動に直面してから慌てずに済むようにということや、記事を読むことのハードルを下げたいということ、また、これにより、語彙力をあげたいということなどのためである。時事ワークシートには、「社説キーワード」「新聞の読み解き」などのワークシートもあるが、「週間トップニュース」が本授業での目的にもっともかなっていると考えている。
- 2 共通基盤教育システム (<https://solomon.ucla.cloud/>) のカテゴリ「キャリア支援」の「言語(日本語)」を課題としている。学生は時間を見つけて自由にパソコン室で課題に取り組んだ。

- 3 二階堂他 (2017) 121 ページにテキスト選択の理由を7項目挙げている。
- 4 『Master of Writing』: 立教大学, 大学教育開発・支援センター, 電子版リーフレット (使用連絡済)
(<https://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/journal/leaflet/>)

参考文献

- 二階堂整・守山恵子 (2014) 「福岡女学院大学メディア・コミュニケーション学科における初年次教育の試み」『福岡女学院大学紀要 人文学部編』第24号 pp.105-120
- 守山恵子・二階堂整 (2015) 「福岡女学院大学メディア・コミュニケーション学科における初年次教育の試み (2)」『福岡女学院大学紀要 人文学部編』第25号 pp.33-52
- 守山恵子・二階堂整 (2016) 「福岡女学院大学メディア・コミュニケーション学科における初年次教育の試み (3)」『福岡女学院大学紀要 人文学部編』第26号 pp.17-36
- 二階堂整・守山恵子 (2017) 「福岡女学院大学メディア・コミュニケーション学科における初年次教育の試み (4)」『福岡女学院大学紀要 人文学部編』第27号 pp.115-127

資料1 図書館ガイダンスの資料 (抜粋)

< 演習問題 >

1. CiNii Articles で「著作権 二次創作」と検索して、検索結果から下記論文 A / B の入手方法を考えましょう。

論文 A 「二次創作」文化を巡るアレコレ : 二次創作と著作権の曖昧な関係

論文 B KEY WORD 「二次創作」と「著作権」にまつわるエトセトラ

著者名 :

雑誌名 (収録刊行物名) :

巻号 :

ページ :

発行年月日 :

発行社 (出版社) :

- ① 福岡女学院大学図書館の所蔵を調べましょう。

- ② 福岡市総合図書館の所蔵を調べましょう。

2. CiNii Articles で「著作権 キャラクター」と検索して、検索結果から下記論文 C / D の入手方法を考えましょう。

論文 C 著作権制度の今後のあり方について (パロディ等の創作物, キャラクター商品化権, 権利の集中化を中心に)

論文 D 平成 27 年度弁理士の日 日本弁理士会近畿支部記念講演会 キャラクタービジネスから学ぶ著作権と知財戦略 基調講演 キャラクターの保護と著作権

著者名 :

雑誌名 (収録刊行物名) :

巻号 :

ページ :

発行年月日 :

発行社 (出版社) :

- ① 福岡女学院大学図書館の所蔵を調べてみましょう。

- ② 『パテント』が公開されていないか調べてみましょう。

3. 公式ホームページも参考にしてみましょう。

サンリオ <https://www.sanrio.co.jp/>

4. Discovery Service で「大地讃頌」を検索し、学内提供サービス以外も追加してみましょう。また、検索結果から下記の論文・記事の入手方法を考えてみましょう。

論文 E 音楽著作権の文化的効果--「大地讃頌」事件を検討する

- ① 福岡女学院大学図書館の所蔵を調べましょう。

- ② Google Scholar で無料公開がないか調べましょう。

- ③ 福岡市総合図書館の所蔵を調べましょう。

- ④ 同一論文にこだわらないのであれば、著者名で似た内容の資料を探してみましょう。

→ 「増田聡」で O P A C を検索してみましょう。

- ⑤ 『聴衆をつくる : 音楽批評の解体文法』内容目次情報を見てみましょう。

資料2 アウトライン説明用資料（抜粋）

1. アウトラインとは何か

前期の授業とテキストの内容を思い出そう。

アウトラインとは、論文の骨格、論文の設計図、論文を書くための大まかな地図などということができよう。骨格ができていれば、それに肉付けすることによって、論文を完成させることができる。設計図があれば、その設計図に従って文章を書きこんでいけば、論文を完成することができる。地図があれば、地図上の必要な場所に文章を載せていくことによって論文を完成することができる。

これまで、イメージマップや構想マップで頭の中にある考えを視覚化したり、参考文献を探し、読むことによって、考えを広げたり深めたりしてきた。それらを生かして、論文の設計図を書いてみよう。

2. アウトラインを作成するために

今期の最後の課題、1,200字小論文を書くためにまず、どんな主張をするのかを決める必要がある。「〇〇は著作権違反である」という主張をする場合を考えてみよう。アウトラインの最も大きな枠組みは、序論、本論、結論の三つである。入門ワークショップで論文を書く場合は、序論、本論、結論で以下を明確にすることが求められる。

- (1) 序論では、〇〇が著作権違反か否かを問題にする理由、その問題の背景と、どんな主張をするのかということを書き記す。さらに、主張の理由として、いくつのことがらを取り上げるかや、理由の大まかな説明をする。理由を述べる順序もよく考えて決める。
- (2) 本論では、序論で予告した理由ひとつひとつを、その根拠を示して詳しく説明することになる。また考えられる反論や反駁も記す。(1,200字で書く場合、理由1つの説明を1段落とし、二つ目の理由を始めるところで改行することを忘れずに。)
- (3) 結論では、序論で述べた主張に矛盾しないように、主張を繰り返し述べる。アウトラインは、骨格であるが、自分のアウトラインを見ると、書くべき内容がわかるようにしたい。(以下略)